

「幌延町における深地層研究に関する」

～研究が三者協定に則り進められていることを確認～

幌延町は今年度、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構（以下「原子力機構」という。）から提出のあった『幌延深地層研究計画 令和3年度調査研究計画』、『稚内層深部（深度500m）における研究の実施に関する検討結果』および『幌延深地層研究計画 令和2年度調査研究成果報告』について、幌延町における深地層の研究に関する協定書（以下「三者協定」という。）第14条に基づき設置する「幌延深地層研究の確認会議」（以下「確認会議」という。）による内容確認結果を踏まえ、三者協定に則り幌延深地層研究計画が進められていることについて確認し、その旨を原子力機構へ文書により通知しました。

幌延深地層研究計画の内容確認に当たっては、令和3年4月16日（金）から令和3年7月16日（金）まで、5回にわたり確認会議を開催し、原子力機構に対し、構成員である幌延町、専門有識者から質疑を行う形で確認を行いました。

確認した事項の概要については、次のとおりです。

【確認会議で確認できた主な内容】

1. 研究成果および研究計画について

（1）令和2年度の研究実績および令和3年度研究計画について

- ・令和2年度は、令和2年度調査研究計画書のとおり3つの必須の課題について研究を行い成果を得ており、令和3年度の研究計画どおり研究を開始し、遅れや新たな課題は生じていないこと。

（2）研究評価の状況について

- ・原子力機構の外部評価において、令和2年度の研究が計画に沿って進められており、令和3年度以降の計画も令和2年度の成果を踏まえて設定されていることや、計画の進捗状況と今後の予定などについて特段問題ないとの評価を得ていること。

2. 深度500mにおける研究の実施に関する検討結果について

（1）研究の必要性について

- ・日本の地質は、大きく結晶質岩と堆積岩に分けられ、結晶質岩を対象とした研究は原子力機構の瑞浪の研究施設で行い、地層が異なる幌延の研究成果は広く堆積岩の地質に適用できること。また、研究は地層処分に必要となる様々な技術を適用し、技術の高度化、信頼性の向上を図るためのものであること。
- ・令和2年度の研究成果によって、深度500mには深度350mと異なる性質の地層が存在していることがより確かになったこと。深度500mで研究を行うことで、技術の実証性を確かなものとするだけでなく、より幅広い地質環境を対象とした技術や経験を得ることができること。
- ・難易度の高い地層を対象として、坑道の設計・施工、安全評価のための一連の技術を実証することで、処分事業において想定される様々な地質環境に適用できる技術の体系を技術基盤として提示することができ、技術基盤の整備により一層寄与するためのものであること。

（2）研究課題の範囲について

- ・深度500mにおける研究は、「深地層研究所（仮称）計画（平成10年10月策定）」において位置付けられており、「令和2年度以降の幌延深地層研究計画」に掲げる処分概念オプションの実証として、必須の課題の範囲内で行う研究であり、三者協定第7条に定める内容の変更に当たらないこと。
- ・深度500mにおける研究は「令和2年度以降の幌延深地層研究計画」の範囲を超える研究はしないこと。

（3）研究工程について

- ・500mの掘削に当たって、施工上のリスク（湧水や可燃性ガス）対策を行ったとしても、想